

現代日本のキリスト教教育理論に関する一考察：キリスト教大学と「教育の神学」

Christian Educational Theory at Christian Universities since the 1980's: "Theology of Education" Critique (III)

深谷 潤 FUKAYA, Jun

● 西南学院大学
Seinan Gakuin University



キリスト教教育, キリスト教大学, リベラル・アーツ

Christian education, Christian university, liberal arts

ABSTRACT

キリスト教学校は、50年近く前から世俗化と人的資源不足を課題に抱えてきた。特に、クリスチャン・スカラー（学者）の育成が急務であることや、信仰と学問、福音と文化の問題に対する神学的追求と信仰の訓練がおろそかにされていることが指摘されてきた。このような問題に対して、学校伝道研究会は「教育の神学」を推進している。それは、「学校伝道（campus ministry）」を通して、神学的立場から教育を見直し、キリスト教学校の実践を模索する立場である。同時に、キリスト教教育を教育学的立場から考察する試みも重要と考えられる。何故なら、教育現場におけるキリスト者と非キリスト者の協働や、学問上の神学と教育学のつながりが模索されなければならないからである。今日のキリスト教学校の状況を見ると、キリスト教教育を担う者としてキリスト者以外の教員を含めたキリスト教教育のあり方を含めて考える時期にきている。「キリスト教に理解ある者」に対する新たな理論が求められている。

For nearly the past 50 years, Christian schools have been facing the problems of secularization and a lack of human resources. In particular, it has been pointed out that the training of Christian scholars is an urgent issue and that theological pursuit into the problems of faith and scholarship and the gospels and culture, as well as training in faith, have been neglected. To respond to these problems, the Gakkō Dendō Kenkyukai ("Campus Ministry Society") has been promoting "theology in education". This approach seeks to rethink education from a theological perspective through campus ministries and explore praxes for Christian schools. At the same time, it holds the attempts to examine Christian education from a pedagogical

perspective as likewise important. The reason is that it is necessary to seek out means of cooperation among Christians and non-Christians in educational settings as well as academic connections between theology and pedagogy. When one looks at the state of contemporary Christian schools, as persons responsible for Christian education, it is clear that the time has come to think about modes of Christian education that include non-Christian educators. New arguments are needed concerning persons who show “understanding” with regard to Christianity.

1. はじめに

教会に所属するキリスト者の数は、1988年に100万人を突破してから徐々にではあるが増加している。2004年のプロテスタント、カトリック、オーソドックスの信徒・教職者の合計総数は、約113万人であり、日本の総人口の約0.89%である。¹ また、キリスト教学校で働く教職員全体に占めるキリスト者の割合は、30%以下が過半数である。² キリスト教教育を行なう場は、教会やクリスチャン・ホーム、キリスト教系社会团体等ばかりではなく、キリスト教学校も同様である。キリスト教学校は、全国の幼稚園から各種・専門学校、小中高、短大、大学、大学院すべてを含めた学校の約3.8%を占め、短大、大学、大学院に限れば、11%、学生数も9.8%をキリスト教学校が占めている。³

統計上、高等教育機関に限れば、決して少なくない。しかし、キリスト教学校で耳にする共通した問題は、キリスト者の減少である。

問題の根本には教会の力不足（経済的、人的諸能力）がある。歴史的にも、学校のキリスト教教育の責任は、主に外国の宣教師達や、その派遣母体である教団や教会がキリスト教教育を推進してきたのである。しかし、その体制は海外のミッションが日本から撤退しはじめた40年以上前から変化し始めた。そして団塊の世代が大量に定年を迎える2007年から、キリスト教学校は本格的にキリスト者不足に直面している。キリスト教教育を担う者の育成は、基本的に教会に責任があるとはいえ、實際上教会のみに頼ることは出来ない。そこでキリスト教教育の現

場の一つとして神学者たちも注目しているのは、キリスト教学校であり、特にキリスト教大学である。本論稿では、特に1980年代に登場した「教育の神学」の立場を批判的に考察することを通して、現代のキリスト教大学において、キリスト教教育を担う者の育成をどのようにすべきかを論じる。

2. キリスト教大学が抱える二つの課題（世俗化と人的資源）

2007年から大学の入学定員と受験者数が約80万人弱でほぼ一致する「全入時代」がはじまったと言われる。統計上はそうであろうが、10年近く前から地方の大学・短期大学は学生確保が難しくなり、実質的な「全入時代」はすでに始まっていた。他方、首都圏・関西圏の有名大学は相変わらず高い倍率を誇っているが、相対的な学生の質の低下を食い止めるため、様々な改革をせざるを得なくなっている。

このような一般的な動向と合わせて、キリスト教大学は、従来から世俗化の問題を抱えてきた。「つたのからまるチャペル」、富裕層の子ども、若者らが集まるファッショナブルで「垢抜けた」雰囲気、英語や国際文化に多く触れることのできるキリスト教学校のイメージが先行し、キリスト教もその一つの要素となるいわゆる「世俗化」に関する議論は、すでに半世紀前の基督教学校教育同盟の報告書にも記述がある。

宣教100年が経ち、キリスト教学校が初期の精神に帰ることが求められている。なぜ

なら、宣教師らが帰国し、海外からの援助が徐々に打ち切られていく中、学校は世俗化の波にさらされているからである。「キリスト教教師」の少なさ、学生・生徒数の増加、高所得者層のみの入学の噂、福音宣教の熱意の低下など)⁴

しかし、今日の大学をとりまく厳しい状況を考えると、表面的な世俗化をむしろ積極的に評価すべきであるとする見方も登場してきた。2005年に四国学院大学キリスト教教育研究所がまとめた論文集の中に、主に大学経営の視点から、キリスト教大学はもっと世間の評判や知名度といった世俗的な評価の意義を重視すべきであり、さらに建学の精神の具体化には「人的資源」が必要と言う主張（土井, 2005）が載せられている。

キリスト教主義大学だからといって学生は入学してくるわけではない。（略）世間の評判という要素を無視できないと思われる。「知名度」と言ってもいいかもしれない。（略）それ（建学の精神）が、大学教育環境の中でどのような形であらわされ学生や地域社会に認知されていくのかという「建学の精神の具体化」という問題の方が重要である。（略）（そのために）「建学の精神」に関心を持ち、その具体化を考えていく人（機関）が必要であろう。ここに「キリスト教主義大学」の人的資源の問題が生じる。⁵

ここで言う「人的資源」とは、端的に言えば、大学と教会をつなぐキリスト者である。すなわち、キリスト教大学において、クリスチャン・スカラー（学者）の育成が課題となる。しかし、その課題もすでに桜井（1959）によって50年近く前から指摘されている。

教会や神学者は、信者であって知性と学識に富むクリスチャン・スカラー（学者）を多く育て、キリスト教主義学校に送り込んでいただきたい。信仰と学問、福音と文化

の問題に対する神学的追求と信仰の訓練がおろそかにされているのがスカラーの育たない原因ではないか。⁶

ここでもやはり、教会が人材育成の責任を負う点では同じである。人的資源について、教会や神学者が対策を考えることは当然である。しかし、その課題は、教会のみで担えるものではなく、今日キリスト教大学が積極的に担うべきものとする。

3. キリスト教教育を神学と教育学の両面から考察する必然性

人材育成の問題を解決するための方法の一つとして、最も直接的な解決策は、キリスト者の増員であろう。その実現のために、学校で伝道することを推進する立場がある。その代表的な団体は、学校伝道研究会である。主にプロテスタントの牧師や学校教師らによって組織され、非常に熱心に伝道、教育、研究活動を行なっている。すでに3冊の研究書を出版している。それらは、「教育の神学」とタイトルがついた神学論集である。論者は、大木英夫、佐藤敏夫、倉松功、近藤勝彦、古屋安雄など、日本を代表するキリスト教学者から、小学校から中高大学までの現場の教師たちまで様々である。

「教育の神学」とは、教会を基礎においた神学的立場から、現代のキリスト教学校教育の在り方並びに日本の教育全体を考察することである。学校伝道研究会会長の高橋義文（1997）は、次のように定義している。

（教育の神学とは）教育そのものを神学的に捉え直し、そこから教育を見直していく、ということである。言い換えれば、キリスト教学校の存在意義は何か、さらには日本における教育はどうあるべきかといった問題に、神学的に取り組んでいくということである。そして神学である以上、それは、究極的には教会に基礎を置く作業であり、

従って問題をその視点からトータルかつラ
ディカルに考察しつつ、現代におけるキリ
スト教学校の新しい実践の道を模索する作
業である。⁷

そして、具体的に教育の神学を実践する方法
として、「学校伝道」(キャンパス・ミニストリー)
がある。キャンパス・ミニストリーとは、小林
宏(1997)によると、「教育・研究機関に専任職
として関わる教職、信徒がなすべき伝道の業」と
定義されている。⁸ 小林の学校伝道の立場は、教
会と学校の結び付きを強調する他の研究者と一
線を画している。それは、学校は教会ではなく、
教会は主日礼拝がその本質であり、学校は教科
指導がその本質と捉えている点である。学校伝
道は、教科に関わるものでなくてはならず、「学
習は祈りと一致する」と考えている。なぜなら、
学習も祈りもどちらも「真理に対して持つ謙遜
な態度」を養い、教育の本質、すなわち「知」に
関わっているからである。⁹ この立場は、学校に
おけるキリスト教教育を神学だけではなく、教
育学的要素を重視する考えとして注目に値する。

しかし、多くの論者は、大木英夫に代表され
るように、教会との結び付きを重視し、教会中
心の学校教育論を建てようとしている。その典
型的な考えが、「キリスト教学校心臓説」である。
それは大木の独創ではない(女子聖学院中高校
長 内藤氏が最初)のだが、以下のような内容で
ある。「キリスト教学校は、公教育の中で心臓の
ような位置をもっている。教会と結び付いたキ
リスト教学校は、教会をいわば心臓として、そ
こから血が頭に流れ、それを動かすようなもの
だ。」¹⁰

また、最近では近藤勝彦(2006)の「新しい人」
の主張も注目される。近藤によると、「新しい人」
は発展概念でも、教育目標でもなく、「キリスト
にある(in Christ)」ということであり、洗礼を
うけることとしてあり、聖霊なる神の御業、恵
みの賜物に他ならない。しかし、それは教育と
関係する。この賜物を待望し、恵みに答え、応
じる教育が存在する。近藤によれば、アウグス

ティヌスの『告白』における、回心の場面がヒ
ントとなる。「キリストを着なさい」という聖書
の言葉によって、新しい出発が与えられた。つ
まり、「新しい人」とは、恵みによって与えられ、
信仰をもって受け取る、霊的な実在を意味する、
と考えられている。¹¹

他方、教会や神学を前面に押し出すことなく、
倫理学としてキリスト教教育理論を形成する佐
藤敏夫(1987)の試みもある。それは、「キリス
ト教文化倫理学」¹²であり、真理、意味、知識、
生命、家族、性、労働、レジャー、所有、権力、
国家など広汎な文化諸領域についてのキリス
ト教文化倫理学的研究¹³の必要性を説いている。そ
の内容は、生命、人格、人権の三つの基礎概念
によって構成されている。¹⁴

また、「教育の神学」第3集(2006年)から強
調されている「霊性」の教育について、金子晴
勇(1997)の「霊性教育」¹⁵を看過することはで
きない。彼の主張を概説すると以下の通りであ
る。聖なる神を礼拝するためには、多様な道を通
って導かれる方法がありうる。一般的啓示(宇
宙・自然・歴史など)から始まって、特殊啓示(特
定の人物、人格的存在、業績、教え、伝承など)
に移るプロセスをとると考えられる。霊性教育
には、自然的宗教(一般的啓示)の役割も大きく、
「宇宙の直観」(シュライエルマッハー)や「被
造物感情」(オットー)などを通したある種否定
的な経験(基礎経験)をもたらす。その中で、神
の前に立つ意識を呼び覚まされ、自己の存在を
自覚する(自然的良心)。その時、自己は霊性と
同じ存在になっている。¹⁶ 霊性は、「感性と理性
とを超越した自己の可能性」であり、「実存」で
ある。そこにおいて、自己は「聖なる者」に出
会うことができる。そのような霊性を覚醒させ
て、「礼拝と奉仕」に学生・生徒を導くのであり、
一般の教育のように人間の理想像を掲げてそこ
に到達することを目指すものではない。¹⁷

学校伝道を重視する、「教育の神学」と同じ立
場で書かれたキリスト教教育関係の理論には、他
にも多数あるが、ここでは割愛する。(註を参照。
小田ドクトリン¹⁸、倉松(2004)の大学礼拝論¹⁹、

兩貝行磨 (1989) のキリスト教大学論²⁰⁾

また、古屋安雄 (1993) は「教育の神学」の中でもいくつか論を展開しているが、それとは別に独自で「大学の神学」を論じている。大学の神学において、彼は大学の本質を神学的に探究することの意義を強調する。大学の本質は、真理の探求である。大学は究極的関心をもって、自発的に真理を探究する (ティリッヒの「神律的 (theonomous) 文化」) ことをめざすべきである、と説く。また、父・子・聖霊の三位一体論を構造化したカリキュラム編成を試みている²¹⁾。大学の神学を含め、学校伝道に関連する論説は、1980年代から今日まで多くある。それらは皆、基本的に教会の力が回復するために、キリスト教学校は何をすべきかが説かれている。

キリスト教教育の神学からの研究は盛んになってきたものの、肝心の教育学から考察した研究成果はまだ少ない。主な理由として、神学者の教育学に対する無理解が背景にあるためと考えられる。その発端となる出来事は、桑田秀延 (日本基督教神学専門学校 [東京神学大学の前身]) が、バルト神学の立場から、キリスト教教育に対して問題提起をしたことだと言われている。具体的には、(バルトのような) 弁証法神学がとらえるような信仰は、教育というプロセスにのることができない、と言う主張であった。²²⁾ さらに、彼らの教育学に対する狭い見方も影響していると考えられる。例えば、大木 (1987) の「キリスト教教育学」の理解は、キリスト教教育を教科の一つとして捉え、キリスト教信仰を教育の過程にいかにかのせるかを考える技術論である。「キリスト教教育学というのは、教育学をなさった方がキリスト教という特殊教育分野に入っていくという形をとっておりました。」²³⁾

神学者の立場から観ると、キリスト教教育を教育学者が行なっても技術論、特殊分野の科目としての扱いがされてしまう、と考えているようである。これは、見方を変えると、キリスト教教育が教会を離れ、教会の外や一般社会に向けた「人間教育」として位置づけられていない、また「人間教育」としての理念がまだ熟してい

ないことを意味している。

人間教育の別の表現としてしばしば用いられる「全人教育」は、大正自由主義教育運動において、玉川学園を創設した小原国芳が最初に提示した。この「全人教育」論が彼のキリスト教信仰とどのように結び付いているか充分論じられることなく、彼の思想も玉川学園もキリスト教教育の観点から展開しなかったことは残念でもある。

実際のキリスト教教育現場の抱える課題に取り組むためには、「教育の神学」の立場だけでは不十分であると改めて主張したい。つまり、今日キリスト教教育は、キリスト者によるものだけではなく、非キリスト者とキリスト者との共働、さらに非キリスト者によるキリスト教教育の可能性について考察すべき時機に来ているのである。現に、キリスト教保育の現場では、キリスト者が主任や園長のみ、というところもあり、実際に信仰をもたない教師による幼児礼拝を行なわざるを得ない状況である。このような現実には、教育の神学は答えることができないと言える。

キリスト教教育を担う者が、教会に籍を置くキリスト者だけではなく、改めて「共同の教会」の意味を再考する時期にあると考える。つまり、キリスト教教育を担う者の対象は、共同の教会の下、聖霊に導かれた者を含むならば、神学的な議論はまだ十分ではないかもしれないが、「キリスト教に理解のある者」も入るのではないだろうか。むしろ、こうした人たちの協力をどこまで生かすことができるかが、キリスト教教育の現場に於ける人的「つながり」を形成し、そのつながりを太くする重要な鍵と言える。

プロテスタントの場合、つながりの本質的部分は、洗礼を通しての神との契約にまで行き着く。これはキリスト者におけるつながりの重要な要素である。キリスト教に理解ある者にとっての「つながり」は何であろうか。これに関して一つのヒントを提示している講演が2004年にあった。それは、キリスト教学校教育同盟主催の第48回事務職員夏期学校「キリストの香りが漂う職場」において速水優 (聖学院名誉理事長・前日本銀

行総裁)氏による「キリスト教学校で共に働く」と題した主題講演である。(2004年7月御殿場・東山荘)

講演の中で、速水氏は、大学のリベラル・アーツの形成のために必要なこととして「キリストの香り」の意義に触れている。

(前略)事務の方で自校のキリスト教主義を明確に頭に入れ、学生が必ずしも在学中に信仰を身に付けなくても、キリストの香を充分知って卒業させてやりたいと思います。そうすれば、卒業後、社会なり家庭に入って、身を処することに迷いつめた時には必ず在学中に味わったキリストの香りを思い出し、教会に行くなり、聖書を読むなり、学校時代に身に付けた香りを必ず思い出して対処してゆくでしょう。²⁴

4. 考察 (これからのキリスト教教育学)

教育の神学が最終的に目的とするのは、教会におけるキリスト者数の増加(近藤)といえる。大学においては、非キリスト者やキリスト教への理解者、シンパ層²⁵など教会と距離を置きつつ、キリスト教との関係を積極的に捉えている学生・教職員の存在を重視すべきと考える。クリスチャン・スカラーの多い一部の大学を除き、ほとんどの大学は、キリスト者の教職員不足に直面し、キリスト教関連行事の運営は容易ではない。教育の神学の立場からも、非キリスト者との共同・共働の重要性は指摘されている²⁶。人間教育をキリスト者・非キリスト者が共に担うためには、確かに抽象的で難解な理論よりも積極的に協力し合う実践が重要である。しかし、同時に狭い意味で捉えられてきた「キリスト教教育学」を検討し、教育の神学とは異なる立場からキリスト教教育を学問的に考察する必要があるのではないか。すでに、日本キリスト教教育学会が1988年に設立され、その試みは開始されているが、思想研究や実践報告の蓄積はまだ充分とは言えない。また、教育学としてキリスト教教育を考察

する学問論も熟しているとは言えない。

キリスト教文化を媒介とし、リベラル・アーツを身に付けることに価値を置くキリスト教大学は少なくない。リベラル・アーツとキリスト教教育を結び付ける類の理論は、東北学院大学の改革で倉松(2004)が紹介する教養教育の在り方にも明確に現われている。

礼拝やキリスト教で伝達する倫理的価値を自由な選択の中で、心に訴えるのがクルトス(cultus)である。それが人格形成と真に結び付いたものが本学の教養なのである。²⁷

また、古屋(1993)もジョン・ヘンリー・ニューマンの『大学の理念』を引用しつつ、神学が探求している「宗教的真理は一部であるだけではなく、一般的知識の条件である」と述べている。²⁸「教育の神学」の立場から、教養教育についてもすでにいくつか論が提示されているにもかかわらず、教育学の研究者からその立場を代表する理論は残念ながら提出されているとは言えない。

さて、速水氏の講演にあるような「キリストの香り」を実現するためには、情緒的な表現や単なる雰囲気作りに留まらず、概念と論理による思惟的作業を通して言語化し、実践の場に共有できる理論形成の努力も同時に必要と考える。そのためには、かつて神学者たちが考えていた「キリスト教教育学」を特殊な技術論として捉えるのではなく、総合的領域を研究対象とした総合科学として捉える視点がまず必要である。先述のように、教育学は複合的な学問として存在している。

実際に、多様な学問領域を教育というキーワードでまとめているのが、今日の教育学の実情であり、それは総合科学として捉えられる。キリスト教教育学は、従来多様な領域が拡散しないために、その要としてキリスト教(宗教的真理)を置いていた。先述のリベラル・アーツもこの構造によって説明されている。

プロテスタント神学は、伝統的に神と人間との断絶を強調し、人間や被造物の世界から神にいたる道を否定してきた。大木は、トマス・アクイナスとボナヴェントゥーラを対比させ、トマスのように知識を積み重ねて神に近づくアプローチは、神への畏敬を疎外するとして批判している。むしろ、ボナヴェントゥーラのようにまず神という原点を捉え、そこから世界を見ていくことが重要と説いている。²⁹この二人は、13世紀のパリ大学の教授であったが、トマスはアリストテレスから、ボナヴェントゥーラはアウグスティヌスから多くを学んでいた。アウグスティヌスは30歳半ばまで遍歴を重ね、最終的にキリスト教の信仰に入った。大木の主張には、アウグスティヌスが、原点を最初から捉えていたわけではないことが見逃されていると思われる。

「キリスト教に理解ある者」による「これからのキリスト教教育」は、神を中心におき、それを前提に構造化する従来型のキリスト教教育理論ではなく、まず、人間から出発しつつ、そこから超越する次元を含んだ3次元的構造をもつものとイメージできる。

しかし、人間から出発するアプローチへの批判は、かつて神学者から枚挙のいとまがないほど多く出されてきた。自由主義神学への批判がその代表であり、日本に於ける最初のキリスト教教育論に対する批判が一例であろう。³⁰

新しいキリスト教教育理論は、人間の内部にすでに信仰がある、という立場をとらず、出会いを通して「贈られるもの」という捉え方をする。これは、実存哲学のボルノーの非連続的契機と類似した考え方である。本稿でボルノー哲学の詳細に触れる余裕はないが、人間の存在論的捉え方と、「超越」の構造は、神の存在を前提にする神学的アプローチと異なるものの、最終的に自己の存在が主体的に形成され、信仰が内部から引き出され、あるいは発達したものではなく、存在自体が超越的存在によって、支えられ、超越的意識もまた「贈られるもの」として受身的に捉えられることになる。この点の実存哲学者ヤスパースの方が明確にされている。³¹

このような、人間の存在論的構造化を基礎作業として、教育の内容や方法に関する議論を積み重ねていくことによって、これからのキリスト教教育は、神学的な上からのアプローチと並行して、人間学的な下からのアプローチによって複合的に充実した理論を持つことになることが期待される。

5. おわりに

本稿では、新しいキリスト教教育学の素描を試みたが、従来のようにイエス・キリストの啓示を前面に押し出すことでキリスト教教育を推進させる神学の立場は、同時に継続的に推進されるべきと考えている。他方、教育学からは、研究対象に取り組み、学問的な真理に対する誠実さからキリスト教文化、教養へアプローチし、超越的次元を教員・学生の意識の中に形成する努力を続けるべきである。それら二つのアプローチによって、啓示と真理（キリストと科学・学問）の接点が、個別的な人格的出会いを契機として実感されると考える。

(本稿は、日本キリスト教社会福祉学会第48回大会[2007年6月23日]シンポジウムの発題「キリスト教教育を担う者」に基づき、加筆・修正したものである。)

参考文献

- 青山学院キリスト教文化研究センター編(1996). 現代におけるキリスト教教育の展望 ヨルダン社
- 雨貝 行磨(1989). キリスト教教育の使命 ヨルダン社
- 古屋 安雄(1993). 大学の神学 ヨルダン社
- 土井 省吾(2005). 大学の財務と建学の精神 四国学院大学キリスト教教育研究所(編) 大学とキリスト教教育 新教出版社 pp.99-162
- 金子 晴勇(1997). 人間学から見た霊性教育 学校伝道研究会(編)キリスト教学校の再建 聖学院大学出版会 pp.126-144
- キリスト教学校教育 9(482号)2004年9月15日 p.5
キリスト教学校教育同盟発行
- キリスト新聞(2003). キリスト教年鑑 2004
- 小林 宏(1997). 今日における学校伝道 学校伝道研究会(編)キリスト教学校の再建

聖学院大学出版会 pp.250-260

近藤 勝彦 (2006). 「新しい人」に応じる教育 学校伝道研究会 (編) キリスト教学校の形成とチャレンジ 聖学院大学出版会 pp.74-86

倉松 功 (1997). キリスト教大学 学校伝道研究会 (編) キリスト教学校の再建 聖学院大学出版会 pp.43-53

倉松 功 (2004). 私学としてのキリスト教大学 聖学院大学出版会

松村 克己 (1958). 宗教と教育 神学研究 関西学院大学 神学部 7 巻 pp.373-402

西谷 幸介 (1987). 日本の神学における「教育」の論議 学校伝道研究会 (編) 教育の神学 ヨルダン社 pp.99-114

大木 英夫 (1987). 教育の神学 学校伝道研究会 (編) 教育の神学 ヨルダン社 pp.12-30

大村 勇 (1959). キリスト教主義学校の現代におけるあり方 基督教学校教育同盟 日本におけるキリスト教学校教育の展望と課題 (II) pp.85-86

桜井 信行 (1959). キリスト教主義学校の現代におけるあり方 基督教学校教育同盟 日本におけるキリスト教学校教育の展望と課題 (II) pp.94-95

佐藤 敏夫 (1987). キリスト教文化倫理学の構想 学校伝道研究会 (編) 教育の神学 ヨルダン社 pp.31-38

高橋 浩 (1983). ボルノー「希望の哲学」における生の二重構造と「超越」 国際基督教大学学報 教育研究 25 号 pp.43-58

高橋 義文 (1997). はじめに「教育の神学」の視点に立って学校伝道研究会 (編) キリスト教学校の再建 聖学院大学出版会 pp.3-5

註

- 1 キリスト新聞 (2003). キリスト教年鑑 2004 p.96
- 2 伊藤 久男・野里 房代 (1996). プロテスタント・キリスト教学校の現状と課題 青山学院キリスト教文化研究センター編 (1996). pp.81-270
- 3 キリスト教年鑑 2004 の統計によると、2003 年のキリスト教年鑑掲載校数 2,349、全国校数 61,989、年鑑掲載大学・大学院・短期大学数小計 191、全国校数 (大・院・短) 1735、年鑑掲載学生数 734,122、全国学生数 21,034,210、年鑑掲載大学・大学院・短期大学学生数小計 319,218、全国学生数 (大・院・短) 326,9440 と記されている。
- 4 大村 (1959). p.85
- 5 土井 (2005). pp.143-144
- 6 桜井 (1959). p.94
- 7 高橋義文 (1997), p.4
- 8 小林 (1997). p.250
- 9 *ibid.*, p.259
- 10 大木 (1987). p.30
- 11 近藤 (2006). p.74-p.78
- 12 佐藤 (1987). p.31-
- 13 *ibid.*, p.37
- 14 キリスト教文化倫理学に関して、深谷潤 (2005) 「日本のキリスト教教育における『キリスト教文化倫理学』の意義と課題」 国際基督教大学学報 I-A 教育研究 47 号 参照。
- 15 金子 (1997). pp.126
- 16 *ibid.*, p.143
- 17 *ibid.*, p.138
- 18 倉松 (2004). pp.36-37 小田忠夫元東北学院学長が、「キリスト教学の担当者、あるいは、キリスト教学科の担当者を採用する時に、専門の勉強あるいは研究だけでなくキャンパス伝道も担当するように、と語られたこと」をさす。つまり、キリスト教学の担当者はキャンパス・ミニストリーにも携わること、これがないと日本のキリスト教大学はやっていけないと考える。一般のキリスト者教師に、定期的に聖書研究会や読書会を担当してもらう。これが、キャンパス・ミニストリーの具体化である。
- 19 倉松 (2004). p.28 礼拝は大学における教養、人間形成に関係している。Culture (文化) は cult (礼拝) を語源としている。カルチャーを重んじる大学は、大学で礼拝をしてきた。礼拝は大学の象徴である。私たちの大学礼拝は、反理性的・非理性的な礼拝であってはならないが、宗教的礼拝として理性を越えるようなものをもっていなければならない。
- 20 雨貝 (1989). 雨貝は、キリスト教と大学の教育理念について、以下のように考えている。今日、キリスト教は大学において、学問の自由ばかりではなく、人間の自由であることを生かすための信仰として諸科学を基礎付けていると確信する。絶えず自己批判しつつキリスト教を発展させ、市民社会に貢献する確信をもつこと、それがキリスト教が大学を設立していることの意味である。
- 21 古屋 (1993). p.236 彼によれば、三位一体論的構造の骨子は、以下の通りである。
父→創造論→自然→自然科学
子→和解論→人間→人文科学
聖霊→救贖論→社会→社会科学
これが、大学の三位一体論的構造に反映されている、と主張している。(p.241)
- 22 大木 (1987). p.16 (「福音主義教育論争」1935-37 年)
- 23 *ibid.*, p.17
- 24 キリスト教学校教育 9, p.5
- 25 松村 (1958). pp.373-402
- 26 倉松 (1997). キリスト教学校の再建 pp.43-53
- 27 倉松 (2004). p.49
- 28 古屋 (1993). p.174
- 29 大木 (1987). p.22
- 30 西谷 (1987). p.101 最初のキリスト教教育理論として、亀徳一男 (1932) 宗教教育の原理 日本メソジスト日曜学校局、があげられる。亀徳の理論は、自由主義神学に基づき、教育とは人間性に内在する

可能性を引き出すことであり、子供の本性に先天的に内在する信仰の芽を引き出して、育てることがキリスト教教育であるという思想に依拠していた。

31 高橋 浩 (1983). pp.43-58